巻頭言

惑星科学会に思う事

惑星科学会は創立した頃から外から見えていましたが、始めの頃はほとんど中の人との交流はありませんでした。惑星科学会の方と初めて仕事で接したのは1998年に打ち上げた火星探査機「のぞみ」(残念ながら軌道上での不具合で火星周回軌道に投入する事は出来ませんでした)だったと思います。何人かの方にPI, Co-Iとしてプロジェクトに参画をしてもらいました。地球離脱時のトラブルにより火星到着が2003年末~2004年初頭に遅れた事で、「のぞみ」と同時期に火星に到着するESAの火星探査機「Mars Express」と共同観測をしようという話が持ち上がりました。「のぞみ」は火星周辺のプラズマ環境観測がメインなのに対して「Mars Express」は火星そのものがメインターゲットと異なる分野を対象とした衛星の為、どういった共同観測が可能かといった事をワークショップなどを開催して検討を進めました。その過程で「Co-Iの交換を行おう」という話になり、希望者を募る事となりました。それまで日本人が殆どかかわりを持っていなかった衛星に何人もの人がCo-Iとして参加出来るという、(特に観測器の製作に関わっている人間からすると)「えっ本当? こんな美味しい話が合って良いの?」という話でした。「Mars Express」のCo-Iですから惑星科学会に話を流しました。希望者を絞るのが大変になるくらい応募があると期待していたのですが、実際には既に「のぞみ」プロジェクトに加わっている人からのみという結果でとてもがっかりしたのを覚えています。

その当時は搭載機器開発はおろか衛星のデータ解析すらもしている人が殆どいなかったという事を後から聞きました。それからの20年弱で惑星科学をめぐる環境もそうですが、「来る10年」で探査計画を検討したり、SLIM, MMXなどの計画に多くの観測機器提案が出てきたりと惑星科学会自身も大きく変わったと思います。海外の衛星に搭載機器を載せないかと相手から誘いがかかる物はまだまだあまり多くないと思いますが、今後「この搭載機器を作るなら日本の協力が必要だ」と言われる観測機器が増えると共に、データ解析、理論など幅広い分野で日本の存在感が増していくことを期待しています。

早川 基(宇宙航空研究開発機構)